

バングラデシュにおける立正佼成会の信仰受容

渡 辺 雅 子

1 はじめに

バングラデシュは、インド亜大陸北東部にある国で、インドとミャンマーに国境を接している。以前の国名はパキスタン（東パキスタン）で、1971年にバングラデシュとして独立した⁽¹⁾。公用語はベンガル語である。人口は約1億5,000万人、世界で7番目に人口が多い国であり、都市国家を除くと世界でもっとも人口密度が高い。また、世界の中でも最貧国の一つである。日本は最大援助国の一つであり、対日感情はとてもよい。また、近年、繊維業界で縫製工場が中国から賃金の安いバングラデシュに移行している状況がある。

国民の83%はイスラム教徒、16%はヒンドゥ教徒、1%がその他で、その他には仏教徒、キリスト教徒が含まれている。バングラデシュの地に仏教が伝わったのはアショカ王時代（B.C.3世紀）以前である可能性があり、遅くともA.D.3世紀には何らかの仏教施設がつくられていた。玄奘の『大唐西域記』（7世紀）には、当地の仏教の実情についての詳細な記述があり、数千人の僧侶がいたという。しかし、11世紀からはヒンドゥ教徒の王朝ができ、13世紀初頭にはムスリム（イスラム教徒）が侵入し、多くの仏教徒がネパール、アッサム、アラカン等に逃れた。1757年まではベンガル地方はムガル帝国などのムスリムの統治下にあったが、チッタゴン地方は1580年から1666年までアラカン王国（上座部仏教徒）によって統治されていた⁽²⁾。その後イギリスの統治下にはい

り、1947年に宗教上の違いから、ヒンドゥ教徒が多数を占めるインドに対して、ムスリムが中心のパキスタンとして独立、さらに1971年には、東パキスタンはバングラデシュとしてパキスタンから独立した。

バングラデシュにはその人口の0.6%、約100万人の仏教徒がいるといわれる。チッタゴン地方は上述のような経緯から、仏教徒が多い地域である。バングラデシュの仏教徒にはいくつかのエスニック・グループがある。その中で大多数を占めるのはバルア（ベンガル人）仏教徒で、そのほか、ラカイン族、マルマ族、チャクマ族などの仏教徒がいる。後者の諸族はモンゴロイドの顔だちをしている。いずれも上座部仏教（テーラワーダ仏教、小乗仏教）に属する。

バングラデシュにおいて、日本の新宗教である立正佼成会（以下、佼成会）が仏教徒の間に急速に教勢を拡大している。本稿は、佼成会の信仰が現地でどのように受容されているかを会員（メンバー）の事例研究から明らかにしようとするものであるが、基礎資料として、次に佼成会についての概要と、そのバングラデシュ布教の展開の概略を述べることから始めよう。

2 佼成会のバングラデシュ布教

佼成会は、1938（昭和13）年に霊友会から分派して成立した教団で、庭野日敬（1906～1999）を「開祖」、長沼妙佼（1889～1957）を「脇祖」とする。庭野日敬は亡くなる前の1991年に法燈継承式を行い、庭野日敬の長男の庭野日鑑（1938年生）が二代会長に就任した。佼成会は宗教協力を目的としたWCRP（世界宗教者平和会議）や新日本宗教団体連合会（新宗連）の中心教団である。平成24（2012）年度の『宗教年鑑』によると、信者数は公称3,232,411世帯で、日本の新宗教では創価学会に次ぐ規模にある。なお、本尊は「久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊」で立像の形態をとっている。

佼成会は、法華経による双系の先祖供養と心の切り替えによって運命を転換

し、人格完成することを目的とする新宗教である。佼成会での基本信行は、①供養、②導き・手どり・法座、③法の習学である。導きは「正しい信仰に導く行為」とされるが、非会員を会員にするための布教活動をいう。導いた人を導きの親、導かれた人を導きの子という。手どりは会員になった者をより本質的な信仰者に育成するために親密な人間関係を築きながら、生活に密着したきめ細やかな生活指導をマンツーマンで行うものである。法座は、「法を中心とした語り合いの場」で、数人から十数人が車座になり、参加者の相談事に他の参加者は教えや自分の信仰体験に則して、その解決方法を学び合うというものである⁽³⁾。法座は佼成会の命ともいわれる。

また、会長の庭野日鑛は、齊家（家庭を整える）を提唱し、そのための「三つの実践」として、「朝のあいさつをする」、「呼ばれたらハイと返事をする」、「履物を脱いだらそろえる。席を立ったら椅子を（テーブルの下に）入れる」ということを述べている。また、煩惱、執着を超えさせる「まず人さま」⁽⁴⁾の精神も佼成会では強調されている。これらの点は、事例の中にも言及されているので、ここで示しておきたい。

佼成会の海外布教については、長らく必ずしも積極的なものであるとはいえなかったが、近年、組織的にも海外布教のスタンスに変化があった。2003年12月に、従来の海外布教課から教務部国際伝道グループに名称を変更、2006年12月には国際伝道本部となり、2010年12月には教務局国際伝道グループとなった。国際伝道本部となって以降、スタッフも増員され、海外への支援体制もしだいに整備されつつあり、海外布教に対して積極的な対応が見られるようになっていく。佼成会の海外布教の中でも、躍進が目覚ましいのがバングラデシュである。

佼成会のバングラデシュ布教の始まりは、1979年に北九州教区西南アジア開発支援視察団（団長は飯澤一雅）がチッタゴン（バングラデシュ第二の都市）を訪問し、ビマン・クマール・バルア（以下BKと記載）と出会ったことから

始まる。1984年と1985年には、BKは当時大分教会長だった飯澤の招きで日本を訪問し、大分教会の竹野青年部長宅に泊り、手工芸技術の習得と信仰活動を行い、大分教会で下付された総戒名をもってバングラデシュに帰国した。帰国後、大分教会との関係はいったん途絶えたが、1995年に、仕事の関係で来日したBKは、かつて大分教会の青年部長で当時は佐賀教会長だった竹野を訪問し、佐賀教会で再入会した。翌1996年に竹野からの連絡を受けた海外布教課が拠点開設の準備を開始し、理事会の決裁をへて1998年12月にバングラデシュ連絡所として拠点がチッタゴン（BK宅）に設置された。会員数の増加にともない、本部理事会より新道場用地購入支援の承認を得て、2000年から新道場建設に着手し、2002年2月には新道場が落成し、同年12月、バングラデシュ支部に昇格した。バングラデシュ支部は、2004年12月には新しく設置された南アジア教会（当時の教会長は斎藤輝雄、のち南アジア伝道区長）の包括下におかれたが、2005年12月に南アジア教会他地域の支部昇格に伴い、バングラデシュ支部からチッタゴン支部に名称を変更した。2006年には首都であるダッカに法座所ができた。2007年12月には南アジア教会から独立し、バングラデシュ教会へと昇格し、初代教会長として日本から有富教順が赴任した。

拠点としては、バングラデシュ教会所在地のチッタゴンのほか、ダッカ法座所、コックスバザール法座所、ポティア法座所、ドムドマ法座所、マヤニ法座所がある。

会員世帯数は、1998年12月のバングラデシュ連絡所開設当時は4世帯、翌1999年12月は13世帯、2002年12月の支部昇格の時点では348世帯、南アジア教会包括下に再編された2004年12月は594世帯、バングラデシュ教会に昇格した2007年12月は2,145世帯、本論文での事例の調査時点の2009年3月は2,956世帯、同9月は3,075世帯である。

バングラデシュの佼成会は、教会長を除き、すべて現地のバングラデシュ人によって構成されている。バングラデシュで佼成会の布教が成功している要因

の一つに、海外修養生制度がうまく機能していることが挙げられる。佼成会の幹部養成機関として「学林」があるが、1994年から学林の本科生（3年間）に加え、海外修養生（2年間）制度ができた。バングラデシュからは、2000年以降、海外修養生を送り出している。海外修養生第9期（2000年）男1人、第10期（2002年）男1人、第11期（2003年）男1人、第13期（2005年）男2人、第14期（2006年）男1人、女1人、第15期（2007年）男1人、女1人、第16期（2008年）男3人、第19期（2011年）男1人、第21期（2013年）男1人、女1人である。

学林では海外修養生は学林生と一緒に寮生活を行い、1年目は日本語学校で日本語を学習、2年目は佼成会の教義や儀礼、実践を学ぶ。教会実習の機会もある。帰国後、全員ではないが、その人材を教会や地方拠点に配置している。

2009年の調査当時、第10期（2002年）海外修養生のカンチャン・バルアはチッタゴン支部長を、第11期（2003年）のショウメン・バルアは教会の総務部長を、第13期（2005年）のモロイ・バルアはダッカ法座所を、アポン・バルアはコックスバザール法座所を担当し、第15期（2007年）のコロル・バルアはポティア法座所を担当していた。日本語ができ、日本の本部で学んだ人材を拠点に配置することは、日本の本部や日本人教会長との意思の疎通を図ったり、通訳・翻訳にあたったり、媒介的な役割としても重要であると思われる、バングラデシュでの布教にあたっただけの役割は極めて大きいものであると考える。

海外修養生の制度以外にもリーダー教育が行われている。南アジアの各教会および拠点のリーダー教育や法華経集中講座も行われ、2010年にはタイのバンコク教会敷地内に宿泊施設も完備した南アジア国際伝道センターが建設され、研修施設が整った。また日本の本部においても2008年から21日間にわたるリーダー教育が行われるようになった。原則として2年間にわたるプログラムである。リーダー教育においては日本語と英語が用いられるが、それを現地語に通訳する役割としても海外修養生経験者が活用されている。



写真1 海外修養生出身のスタッフと婦人部の人たち

前列はスタッフ（左からアボン、カンチャン、ショウメン、コロール）、
後列は婦人部（左から三番目は婦人部長のデビカ、四番目はラオザン主任のレカラニ）

本論文では、バングラデシュの会員たちがどのように佼成会の教えを受け止め、実践しているのか、彼らが佼成会のどこに魅力を感じているのか、自分自身がどのように変わったか、今後の佼成会についてどうすれば布教が拡大すると思っているのかなどに焦点をあてて、事例を中心に見ていくことにする。

筆者は、バングラデシュには、2009年3月、同年9月、2012年9月の3回、調査に訪れた。2009年3月には、2,200人を集めてチッタゴンで開催された佼成会の青年結集大会「バングラデシュ青年菩薩の集い」⁽⁵⁾の参与観察を行った。さらに、教会所在地のチッタゴンの会員のインタビューを行った。2009年9月には、3ヵ所の村の会員の親戚の家に宿泊させていただき、首都ダッカ、第二の都市チッタゴン、ミャンマー系住民もあり、世界で一番長い海岸線のあるコックスバザール、そして村と見ることで、バングラデシュにおける都市・農村の



写真2 青年結集大会で
来場者を花で迎える青年部員



写真3 青年部による音楽の披露



写真4 ラカイン族の踊り



写真5 斉藤南アジア伝道区長の挨拶と
通訳をするカンチャン・バルア

生活の格差を実感した。その各々の場所で、インタビューを行っている。2012年9月には、ダッカ、チッタゴンのほか、チッタゴン丘陵地帯という特別許可を取得しなければ入山できない少数民族の住む地域、コックスバザールおよびその周辺の仏教徒の村を訪ね、インタビューを行った。

今回扱う事例は、2009年の3月および9月の調査によって得られたものの一部である。したがって、年齢、職業、佼成会での役などについては2009年時点のものである。

壮年部からは、チッタゴン支部主任のオシム・バルア（1996年入会、56歳）

と理事長のデシャプリア・バルア・チョードリ（2003年入会、55歳）の2人を取り上げる。婦人部からは、婦人部長デビカ・バルア・チョードリ（2003年入会、37歳）、ラオザン主任レカラニ・バルア（1998年入会、52歳）、婦人部リーダーのエーリ・バルア（2003年入会、27歳）、古参会員であるジョンナ・バルア（2003年入会、42歳）、一般会員のシテイ・バルア（2007年入会、25歳）、同じく一般会員のリピィ・バルア・チョードリ（2009年入会、44歳）を取り上げる。青年部からは、バングラデシュ教会青年部長のオニメシュ・バルア（2003年入会、35歳）、チッタゴン支部青年部長シャソン・バルア（2004年入会、28歳）、コックスバザール法座所青年部長ルモン・バルア（2006年入会、34歳）、そしてコックスバザール法座所ラカイン族の女子部長フルフル・セン（2007年入会、17歳）を取り上げる。なお、青年部のルモンとフルフルはコックスバザールで調査したが、あとはチッタゴン在住者である。

なお、インタビューは元海外修養生でバングラデシュ教会のスタッフがベンガル語と日本語の通訳を行った。通訳を介してではあるが、対象者の語り口を重視して以下の事例に接近している。写真についてはすべて筆者が撮影したもので、特別に撮影年を記入していないものは、2009年に撮影したものである。

3 壮年部の場合

日本の佼成会の活動の中心を担っているのが婦人部であるのと異なり、バングラデシュの場合、壮年部の役割が大きい。それはバングラデシュにおいては女性の自立的な活動が制限され、男性に決定権があることとも関連する。その点で、壮年男性会員のあり方が重要である。上座部の仏教徒である彼らにとって、自分で、自国の言葉であるベンガル語でお経をあげることに、気持ちを出せる法座は魅力である。

(1) 事例1 オシム・バルア (チッタゴン支部主任)

属性

オシム・バルア (男) は56歳、チッタゴン大学卒 (化学専攻) で、農業関係 (政府の仕事) をしている。

佼成会への入会と活動

佼成会に入会したのは1996年で、最初の会員 (メンバー) 11人のうちの1人である。チッタゴンに法座所 (拠点) が開設されたのは1998年のことだ。

導きの親はBKさんで、「新しい菩薩行」のことを聞いて関心をもった。その話を聞いて、自分からBKさんのところに行った。新しい菩薩行とはどのようなことか知りたかった。BKさんの家で、BKさんと親戚の人の二人が一緒にご供養しているのを見た。バングラデシュではご供養は僧がやるものだ。自分たちでできるということに魅力を感じた。お経が好きになって、毎週金曜日にBKさんの家に行くようになった。初めのころは、ご供養はBKさんの自宅で行っていた。佼成会の釈迦牟尼仏陀と上座部仏教の仏陀とは、願いは同じだが、やることが違うという説明を聞いたり、開祖さま (庭野日敬のこと。以下同) の生活のビデオを見たりした。BKさんが教えていた。BKさんはいつも信仰のことを話したが、心の中は秘密の人。心を出さない人だった。日本の佼成会から島村雅俊さん、長谷川泰弘さん、飯澤一雅さんが時々来てセミナーをした。

入会時に問題はもってはいなかったが、2人の娘に佼成会の教えを伝え、勉強もがんばってほしいという願いがあった。のちに上の娘は医者になり、下の娘はダンスで身をたてた⁽⁶⁾。

これまで22人を導いた。2006年には佼成会の理事会のメンバー (財産と法律関係、当時はあまり活動なし) になり、2008年7月か8月にチッタゴン支部主任 (支部の主任は1人だけ) に任命された。2000年にはご本尊拝受のために訪

バングラデシュにおける立正佼成会の信仰受容



写真6 チッタゴン寺



写真7 チッタゴン寺の僧侶（2012年撮影）

日、2006年には「第三回世界サンガ結集大会」⁽⁷⁾に参加するために日本に行き、その時に「教師（ダルマティーチャー）」の免状をもらった。

妻も佼成会の活動をしている。妻も自分も佼成会が大好きで、定年になったら、佼成会のことに時間を使いたい。娘も佼成会の活動をしている。長女は学生リーダーだったが、今は結婚してダッカにいる。

上座部仏教との違いと佼成会の魅力

上座部仏教の寺には式典に行くくらいで、もともとあまり行かなかった。佼成会と上座部仏教の違いは、上座部仏教ではお坊さんが説法し、お経による供養もお坊さんがする。佼成会では自分たちで供養をする。お経を自分であげること、みんなと一緒に読経すること、日常使っているベンガル語でお経をあげるとはよい。また、法座の中でみんな話をする。これはすごくエキサイティングなことだった。

佼成会が伸びたのは、ベンガル語でのご供養、法座、みんなでやることをとおして、仲良くなることができたこと、そして、今年（2009年）から始まった彼岸の供養で、亡くなった人の名前を用紙に記入することも魅力的だ⁽⁸⁾。これまで仏さまに対しての供養だったが、今年から彼岸の意味、先祖の名前を調べての供養になった。「おじいさんの名前は？ どんな人だったか聞いてください」と言われ、ルーツ図に記入する。それがおもしろくて人気になった。青年たちはお彼岸の供養を見てすごいなと思っている。おじいさんがどのような人かわかってよい。これまでバングラデシュの佼成会では六親眷属の名前は集めていなかった⁽⁹⁾。

もともと上座部仏教徒なので、六波羅蜜、四諦の法門などは学んでいる。上座部では学ぶだけだが、佼成会では実践することができる。有富教会長が教学の勉強会（約1時間15分）をやって、みんな好きになった。壮年部、婦人部、青年部対象に各1回、月に3回（バングラデシュの休日の金曜日）勉強会がある。教学のあとに法座がある。壮年部の勉強会には30～53人参加する。壮年

バングラデシュにおける立正佼成会の信仰受容



写真8 バングラデシュ教会で皆そろって読経供養

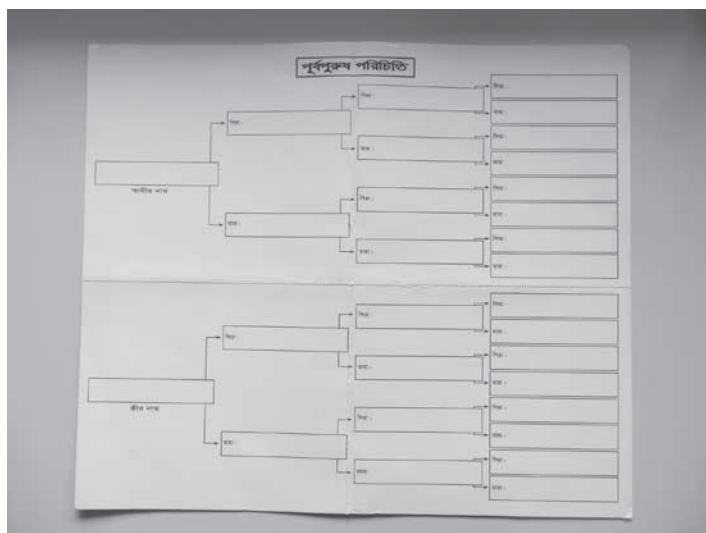


写真9 先祖のルーツ図

あいている四角の中に父方母方の先祖の名前を記入する

部には1,500人のメンバーがいるが、積極的なメンバーは100～200人くらいだ。

法座は20～25人で一法座だが、法座リーダーが法座で「むすび」をする。バングラデシュでは壮年たちは思っていることを口に出さない。しかし、佼成会では法座で思っていることを話す。これはすごいことだと思う。

ベンガル語の経典

近所にイスラム教徒、ヒンドゥ教徒の家があったが、彼らから、なぜあなたはベンガル語のお経を読むのかと聞かれた。バングラデシュでは仏教の経典はパリー語である。ベンガル語の経典は、最初のメンバーの11人のうちの1人であるトシャルムシリ（BKの親戚）が、1988年か1989年ごろに英語の経典からベンガル語に訳した。彼はバングラデシュ鉄道の法律担当官で英語の先生だった。今は佼成会には来ない。よいお経典だ。

自己変革

佼成会で活動をして、日常生活では家族がよい関係になった。みんなが変わった姿をみて入会する。一番変わったことは、毎日2回ご供養すること、ご宝前（仏壇）を掃除することだ。（佼成会のご本尊をいただく前から仏壇はもっていた。バングラデシュの仏教ではいろいろな仏像が入っている。）そして、誰が来た時でもあいさつし、頭を下げることだ。バングラデシュでは「ナマスカール」とあいさつの声だけだが、佼成会では合掌しておじぎをする。

日本についてのイメージ

日本に対するイメージはバングラデシュではよい。日本はよい国と聞いたが、行ってみたら、（バングラデシュと違い）道路や床がきれいなことに驚いた。日本に実際に行って、もっとよい国だと思った。

開祖さまの故郷の新潟に行ったが、開祖さまが田舎で生まれて、どうやって東京まで出てきたかを考えた。あそこで生まれて、東京に出て、世界に教えを広めたのはすごいと思う。バングラデシュの田舎のほうにも、開祖さまが生まれたような家がある。開祖さまに関心があって、ビデオを見たり、本を読んだ。

脇祖さまもどういう人か関心があって、勉強した。元海外修養生がこのごろこうしたものを翻訳して出している。

今（2009年3月）は、有富教会長が日本語を教えている。日本語を話すと日本から来た人が喜ぶ。日本に勉強に行きたい人もいる。日本語教室は3カ月前から月1回、金曜日から土曜日に日本語を学ぶ。初めは来る人が多かったが、今は20～30人程度で、あまり来ない。自分は全部出ている。

佼成会を広めるための工夫

現在（2009年3月時点）、6つの法座所がある。法座所を増やしてもっと研修をするとよい。人が来ない法座所はない。コックスバザールは（規模が）大きくなった。法座所が必要なのは、遠いと来るのが難しいからだ。お金もかかる。人々は貧しいので交通費が大変だ。佼成会は伸びていくと思う。あと5～10年たったら、すごくなる。佼成会では深く仏教を勉強できる。それと実践に魅力がある。5年前、斉藤伝道区長がお役をいただいた時には、信者数は300人くらいだった（注：2004年に斉藤が南アジア教会長になったことを示す）。信者が増えているのは、よく理解して実践するからだ。

しかし、日本のように飛び込み布教（知らない人の家に行って布教すること）は難しい。親戚、知人ならば導きは可能だ。まずは親戚、友達から導く。

佼成会とイスラムとの関係には問題はない。世界平和のためにやっているのだから、なにか行事がある時にはイスラムの人も誘う。上座部仏教のチッタゴン寺の僧とは大変いい関係だ。

（2）事例2 デシャプリア・バルア・チョードリ（バングラデシュ教会理事長）

属性

デシャプリア・バルア・チョードリ（男）は55歳、Model という製菓会社の社長（従業員500人）である。学歴は小学校卒、3人の子ども（男1人、女2人）がいる。

佼成会への入会と活動

2003年に（夫妻とも）入会。導きの親はBKさん。昔からの知人のラカルチャンドラ・バルアがBKさんに紹介してくれた。

日本の本部から時々人が来た時に佼成会についての研修を受けた。その内容は開祖さまの教えはみんなが大切、みんなの中に仏性があるというものだ。何かある時に考えてみるとそのとおりだ。入会時には何も問題を抱えてはいなかった。佼成会の教えが好きになったので入会した。

家族と親戚を50人導いた。佼成会のお役は、理事長兼会計監査である。妻はバングラデシュ教会の婦人部長だ。ご本尊をいただいた日（24日）には自宅で法座をしている。

上座部仏教と佼成会の違い

上座部の寺にはよく行っていた。寺の役をしていた。今は役はやめて佼成会の理事長をしている。寺はチッタゴン大学の裏にある寺だ。チッタゴンには大きい寺は三つある。小さい寺もある。

佼成会への導きにさいしては、「実践を続ければわかる。在家仏教と上座部仏教の願いは一つ」と言って説得する。

佼成会の魅力

まずはご供養、そして、「人さま」のことを考える、互いに助け合う、法座の中で悲しいこと、うれしいことを話せる。法座が一番いい。

自己変革

人間関係のこと、家族のことで怒らないという実践を毎日した。前はすぐ怒ったが、今はあまり怒らない。佼成会に入って少しずつ実践して怒らなくなった。（同席していた妻の話では、前はすごく怒ったが、今は怒らなくなった。毎日、朝夕ご供養している。）

開祖さまは、「まず人さま」を大切にしている。世界平和の活動をしている。困っている人にお金をあげたりしている（慈善）。自分も親戚や友達の親戚と



写真10 理事長宅の宝前（仏壇）

中央は本尊，左は総戒名と宅地因縁。右は開祖・脇祖の法号。

右下の雪が屋根上にある家は開祖庭野日敬の生家の写真

かにお金をあげることがある。

日本についてのイメージ

日本は戦争のあと、みんなで一緒に平和な国をつくった。これはよいことだ。そこから開祖さまの教えが広まっている。佼成会に入会しても日本のイメージはあまり変わらない。もともと日本に対してはよいイメージをもっている。

日本には2005年と2006年の「世界サンガ（結集大会）」に参加した時の2回行った。2005年は15日間日本に滞在した。豊田教会で、布教活動の研修をした。日本人が時間を守る、掃除をする、真面目にやっているのを見ていいなと思った。自宅に仏壇は小さなものしかなかったが、日本に行ってご宝前をみて、大きなものをつくった。

佼成会を広めるための工夫

もっと広めるためには青年たちを導いたほうがよい。NGO 的なことで、仕事を見つけてあげることができればよい。キリスト教は NGO のようなことをやっている。青年たちにそういう場をつくれれば会員はもっと増える。テクニカルスクールで車の運転を教える、テレビの修理、パソコンの修理といった学校をつくと助かる（授業料をもらわずに訓練する）。JICA のような活動ができたとしても広まる。NGO とかテクニカルスクールをつくるのが難しい場合も、コンピュータができる人はいるので、教えたりしたらよい。女の仕事で、服をつくったり、小物をつくったりすることはどうか。女性は家事・育児で結構大変だ。生活が苦しい人もいる。

貧しい人が多いので、困っている人が多くなったら、今のようにはいかない。イスラム教国のバングラデシュでは仏教徒はマイノリティなので、仕事を見けるのに不利だ。本当に必要なことは仕事。仕事をつくることだ。

4 婦人部の場合

日本の佼成会は、婦人がその活動の中心を担っている。しかしながら、バングラデシュの場合は、男性の下位に女性が位置づけられ、また、女性が一人で外出したり、奥向き以外の活動をすることには抵抗がある。チッタゴンにある教会道場では、毎週土曜日は婦人部が担当し、宝前（仏壇）への供物はもとより、女性たちが導師・脇導師を担当し、読経供養を行う。そしてその後、婦人部の法座が行われる。僧ではなく、自分たちが実践すること、そして女性が中心にやることなどは佼成会に入会するまではなかったことである。事例の中で、こうしたことに対する女性たちの感覚にも注意して見ていただきたい。そしてまた着目してほしいのは、「家庭教育」についてである。佼成会と密接な関係をもつ組織として、家庭教育研究所がある。この家庭教育のセミナーをバング

ラデシュでもやっている。「丸山さん」として言及されているのは、丸山貴代所長（当時）である。バングラデシュでは、ある程度裕福な家庭は家庭教師をつけることが一般的で、子どもの教育に対する意識は高い。仏教徒のあいだでは、イスラム教国の中で社会的に上昇していくためには教育の必要性が認識されている。しかしまた、子どもが勉強しないということは親の悩みで、その他でも子どもが親のいうことを聞かないという親子間のコミュニケーションの問題が生じている。バングラデシュでは子どもは叩いてしつける傾向があり、日本からの家庭教育の講座で語られる親子のあり方は大変新鮮なものである。

（１）事例３ デビカ・バルア・チョードリ（バングラデシュ教会婦人部長）

属性

デビカ・バルア・チョードリ（女）は37歳、バングラデシュ教会全体の婦人部長である。夫（デシャプリア、事例２）は、教会の理事長兼会計監査の役をしている。デビカは高校卒で、子どもは17歳の長女、14歳の次女、11歳の長男がいる。夫は製菓会社（従業員500人）の社長である。

佼成会への入会と活動

2003年に夫が、BKさん（夫の友人の知人）と飯澤さんの導きで入会した。その後、夫から誘われた。夫が一日2回ご供養するようになったことと、道場でご供養と法座を見てよかったので入会した。

導きの子（直接の導き）は、100人いる。そのなかには導きリーダー（10人以上の導きが必要）もいるので、孫世代も入れると500人になる。2005年には導きリーダーと婦人部長になった。2006年にバンコクに研修に行った⁽¹⁰⁾。2006年10月に日本の本部で行われた「世界サンガ（結集大会）」で説法のお役をいただいた。それで、その時までには、100人導きをするという願いをもっていたので、たくさん導きをした。日本の本部での2009年のリーダー研修にはバングラデシュから4人（デビカ、オニメシュ、ショウメン、モロイ）行った。そこ

で学習したのは法華經の28番までの勉強、開祖さまの話、日本の仏教の話、大聖堂、WCRPの話である。手どりの仕方、宝前へのお給仕、法座の実習に大宮教会に行った。

家には家事使用人がいるが、自分でも家事をやっている。佼成会の活動もあるので、時間をつくるのは難しいががんばっている。佼成会の活動には、一週間に4～5回、1回2時間～2時間半程度をつかう。道場でご供養をして、法座をして、みんなの気持ちを聞く。カンチャン支部長が研修をする。

佼成会に入会前に帰りが遅くなって、夫に怒られたことがあるが、夫も佼成会に入会しているので、佼成会の活動については遅くなっても大丈夫だ。だから夫に感謝している。

バングラデシュの婦人部

チッタゴンの教会と各法座所には婦人部、壮年部、青年部がある。教会では式典の前か後に各地域の婦人部が集まる。支部は各法座所の主任と一カ月に1回教会でミーティングがある。バングラデシュでは男性中心だが、ラオザン法座所、ドムドマ法座所は主任が女性である。

日本は女性が自由だが、バングラデシュは自由でないので、お役をするのが難しい。できる人はがんばっている。

チッタゴンだけだが、婦人部は週に1回集まりがある。チッタゴンでは土曜日に婦人部のご供養を担当する。当日のご供養のあと、法座は9時30分から12時まで行う。その後、会員の手どりや、病気の人の家に行く。額装ご本尊ご安置式では、会員の家に行って供養する。

女性が導師・協導師をすることはよいことだ。他の組織でも女性が活躍することがある。政治や会社の分野でも女性は進出しはじめ、現在の首相も女性である。だんだん昔の考えは変わりつつある。

バングラデシュでは女は男をたてる。お金は夫がにぎっている。共稼ぎでも妻の稼ぎ分を夫にわたして、夫が分配する。外で働く女性は増えている。二人



写真11 額装本尊

右は現在下付されている額装本尊。総戒名と宅地因縁はベンガル語だが、開祖・脇祖の法号はバングラデシュ教会では日本語のままにしている。左は、以前海外の会員に下付されていたもので、中央の仏像は本部大聖堂の本尊の写真である

で働かないと生活が大変だ。日本では婦人部が強いが、バングラデシュではあまり強くない。子育て、家事など家庭の仕事が大変だ。親戚が来た時も自宅に泊まる。そういうことにも対応しなくてはならない。親戚はよく来る。

導きリーダーは、バングラデシュ教会には男女合わせて300人くらいいる。そのうち婦人部は50人くらい。婦人部は法座所も含めて全体で1,000人くらいいる。

教会長の月1回の教会での研修会には婦人部では50人くらい集まる。みんなで仲良くなれるのでよい。チッタゴン以外の婦人部との交流はある。家庭教育の丸山さんが来た時はセミナーに1,000人集まった。



写真12 家庭教師が来て勉強する子ども

丸山さんの家庭教育セミナー

2005年にバンコクで丸山さんの家庭教育のセミナーがあった。その前は、自分は子どもに対して、すぐ怒って叩いていた。セミナーから帰ってきてから叩く気持ちがなくなった。娘から「お母さんよくなったよ」と言われた。子どもたちから「お母さんはすごい」と言われている。法座の中ではこのような体験を話す。

丸山さんはこれまで3回バングラデシュに講演に来たが、その話は役に立つ。丸山さんのセミナーで、「子どもと友達になってください。子どもたちがどういうことをやりたいかわかってください。やりなさいと命令するのではダメだ」という話を聞いた。それを応用して、法座の中で、子どもに反対された時には、子どもの心のようになることが大切だと指導する。丸山さんから「子どもとは友達のようになって」と言われたことを伝える。バングラデシュの親子関係は

友達のようにはないので、この話は驚きだった（注：バングラデシュでは親が子を叩いたりし、親子関係は上下関係である）。

丸山さんの話を聞いて、実践している人もしていない人もいるが、大体やっている。もっと昔からこういう研修があったらよかったという人が多い。丸山さんの話は、親子、夫婦についての話だ。2008年は男、女、青年の研修が別々にあったが、2009年（今年）は一緒にやった。同じ話を3グループが聞いたことはよかった。家庭の中で夫婦二人とも怒ったら大変だ。どちらか一人は子どもに優しく話したらよい。

導き・手どりについて

導きについては、導きした人は、知っている人も知らない人もいるが、対象は仏教徒の人たちだ。話をして、あなたは仏教徒ですか、と聞く。髪分け目に赤い色が入っていると、ヒンドゥ教徒だとわかる。仏教の人はあまりいないので、あなたのお父さんは誰ですかと聞いていくと親戚だということがわかったりする。佼成会の式典がある時、知っている人に「式典があるけれど、行きませんか」と誘う。その時にご法（教え）のことも教える。知人が病気の時は、大丈夫ですよ、と力づけるために訪ねる。

バングラデシュには、とても貧しい人がいる。一日1食しか食べられない人もいる。（貧しい人が佼成会に来たらいやがるか、という問いに対して）貧しい人が来てもらえない。けれども、お金のない人がお経をあげて、お金が入るようになったという話はまだない。

課題は、第一に、会員が増えるので手どりが必要なこと、第二は教会道場での当番修行（掃除、宝前への給仕。男も女もやる）である。

手どりについては、導きリーダーが主に会員宅を訪ねる。導きをした人にも、お元気ですかと自宅まで行く。長いこと来ない人には手どりに自宅に行く。「開祖さま、仏さまの教えは実践しないと功德が出てこない、一緒にやりましょう」と言う。あの人がいやだということで来ないこともある。まず自分で実践しな



写真13 婦人部が導師・脇導師になったの供養
中央が導師、左右は脇導師。肩にかけているのは「おたすき」



写真14 読経をする導師・脇導師

いといけない。そうすればわかると説得する。

導師・協導師のお役、女性の自立への佼成会の役割

上座部仏教のお寺は、説法・読経はお坊さんがやる。お寺では自分の気持ちを出すことができない。佼成会では女性でも導師・協導師をすることができる。法座では自分の気持ちを出せるので好きになる。女の人でもご供養ができるのはよいことだ。こうしたことができるようになったのは佼成会のおかげだ。

導師・協導師を女性がやることには、気持ちが動く。自分ががんばれば、他の人もがんばる。すごくいいことだと思う。佼成会に入る以前には、女の人一人で外に出ることはできなかった。女の人一人で親戚の家に行くことも珍しい。こうした状況の中で、導師・協導師を女性がやれることは、画期的だ。導師・協導師をやる人は20人くらいいる。4人はお役がある。それ以外は導きリーダーだ。これをやることは女性たちにとって、とてもうれしい。導師・協導師のお役をいただいた時は始まるずっと前に道場に来る。

先祖供養

先祖供養にはルーツ図（写真9参照）のカードをつくり、父母や祖父母、その上の先祖を記入する（バングラデシュ独自）。カードのよいところは、自分たちが亡くなっても孫にも自分たちの名前がわかることだ。みんな喜んでやっている。

3月、9月は彼岸供養、7月はお盆供養をする。バングラデシュでは、こうした行事はこれまでやらなかった。その意味もベンガル語で書いてある。

おたすき・数珠について

おたすきはとてもいい感じ。おたすきをすると話の仕方、考え方を変えなければいけないという感じになる。悪いことができない。お数珠をもてば、悪いことを考えることができない。教会長さんから、おたすき、お数珠があれば、反対する人に感謝できると言われ、そうした経験もした。

佼成会を広めるための工夫

研修がたくさんあればよい。また、バングラデシュは貧しい国なので、がん

ばりたい気持ちがあってもできない。婦人部のために、学校をつくることのできればもっと人数が増えるだろう。そこでお金を得ることのできる仕事を覚える。また、託児所をつくれば、女性が働ける。このごろは、女性も銀行員、先生などで働くなど男みたいになっている。また、手工芸品をつくったらよい。教えてくれる先生もすぐ見つかる。売る場所も見つかる。自分たちでつくったら自分たちで店もつくれる。

(2) 事例4 レカラニ・バルア（ラオザン支部主任）

属性

レカラニ・バルア（女）、52歳。チッタゴンに住んでいるが、実家のあるラオザン（チッタゴンから北東に25km）で導きをし、そこの主任をしている。大学卒（哲学専攻）で、電鉄会社に勤務し、事務系の上位の役職についている。夫（59歳、大学卒）はさまざまなものを扱うビジネスを自営している。夫は1992～1998年にかけて、日本への出稼ぎ経験があり、日本語を話す。日本で稼いだ資金で、自宅のある5階建てのビルを建てた。子どもは5人で、男1人（23歳、大学院在学中）、女4人（四女は大学在学中）である。（インタビューの時には、夫、長男、四女、親戚の女の子、レカラニの母が同席していた。）

佼成会への入会と活動

佼成会には1998年に夫とともに入会。佼成会の最初の11人のうちの1人で、一番初めの女性の入会者だ。夫は佼成会の壮年部に、3人の子どもは青年部に属している。また婚出した長女はチッタゴン支部長であり、元海外修養生のカンチャン・バルアの妻である。

導きの親は、トシャムスリさん（現在は佼成会にあまり来ない）で、親戚で仕事の同僚でもあった。バングラデシュに佼成会を設立するということで、チッタゴンのホテルで佼成会についてのセミナーがあり、それをトシャムスリさんから聞いた。そのころ、夫が日本での出稼ぎから帰国したが、夫は日本にいた



写真15 レカラニ宅の宝前（仏壇）
中央は佼成会の本尊，その他各国の仏像が安置されている

時、友達から佼成会がよいということを聞いていたので、バングラデシュで佼成会が始まったことを聞いて、家族みんなで一緒に入ったらどうかということになった。当時、何か問題を抱えていたということではなかった。

導きの子は約100人で、実家のあるラオザンで親戚やその他の人を導いた。夫の生家もラオザンにあるので、自分と夫がローテーションを組み、一週間に1度行く。自分は一週間のうち2日休みがあり、夫はビジネスをやっていて、ラオザンに支店があるので対応が可能である。ラオザンには会員は200人くらいいる。うち70人は青年だ。チッタゴンで開催された2009年3月の青年大会にも52人が参加した。

上座部仏教との違いと佼成会の魅力

上座部仏教と佼成会は、目指すところは同じだが、実践が違う。佼成会の実践が好きだ。一番よいのは女でも自分でご供養できることだ。法座の中で話合うこと、他の人のために何かやることもよい。法座は、婦人、壮年、青年に

分かれてやっている。婦人の法座では、夫婦関係、嫁としてのつとめ、子どもの勉強、親戚のことなどの話が出る⁽¹¹⁾。法座では、わかる人からアドバイスをもらえ、また、自分の気持ちを出せることが魅力だ⁽¹²⁾。

自己変革

「自分が変われば、相手も変わる」という教えを聞いて、これまで職場では人が間違えた時に、あなたが間違えたからだと怒ってしまっていたが、自分が間違えたかもしれないと振り返ってみるようになった⁽¹³⁾。家族とけんかした時も、自分も間違えたからと反省する⁽¹⁴⁾。

宝前（仏壇）

宝前には、インド、スリランカ、タイのさまざまな仏像に加えて佼成会の本尊も安置した。上座部の高僧の写真を部屋に掲げることはバングラデシュではよくあることだが、佼成会の開祖さまの写真も加えて並べた。上座部仏教と在家仏教である佼成会の究極の願いは同じなので、仏像を併置することも開祖さまの写真を高僧の写真とともに併置することも問題はない。水、ご飯、花は毎日あげる。

導きとお役上の課題

導きでは、開祖さまの願い、みんなが幸せになること、「希望」を話す。日本に行った時、開祖さまの故郷の新潟に行った。大変印象的だった。そこで導きする時には開祖さまの生活とか願いを話した⁽¹⁵⁾。

会費は20タカ（当時1タカ＝1.5円）だが、導いた人は貧しいので、毎月のお布施、会費を自分がかわりに出すこともある。入会の時におたすき、数珠で120タカいる。佼成会のことを話して、入りたいが、お金がないと入れないという問題もある。入会する者は字が読める人々だ（バングラデシュでは識字率は高くない）。お経は読める。

お役をしているうえで感じるのは、お金の問題。なんとか困った人たちのために仕事を見つけない。仕事がないというのが大きな問題だ。法座をすると仕

事で困っていることがわかる。イスラム教徒には仕事を斡旋しても仏教徒には斡旋しない。たとえば職場で人が1人必要な場合、知っている人を紹介するのだから、仏教徒は不利だ。

佼成会を広めるための工夫

(これから佼成会がどのような点をアピールしたら、広まると思うか、という問いには、) 国は貧しく、お金に困っている人が多い。テクニカルスクールのようなものをつくって、そこで、勉強して仕事を見つけることができれば、佼成会にもっと人が集まるかもしれない。

(3) 事例5 エーリ・バルア (チッタゴン支部婦人部リーダー)

属性

エーリ・バルア (女) は27歳、2004年に、チッタゴン支部支部長で元海外修養生のカンチャン・バルアと結婚、4歳の子どもが1人いる。事例4のラオザン支部主任のレカラニ・バルアの長女である。現在は専業主婦だが、以前は小学校の教師をしていた。学歴は、大学院修士課程中退 (専攻はビジネス・アドミニストレーション) である。カンチャンとは佼成会で知り合い、恋愛結婚した⁽¹⁶⁾。

(なお、この事例については個人の入信のプロセスよりも婦人部の活動についての聞き取りが主である。)

佼成会への入会と活動

導きの親は母 (レカラニ) で、2003年に本部のスタッフの島村さんの研修があった時に、母から言われて行って入会した。婦人部のリーダーである。

道場には一日1回は行く。道場の隣に住んでいる。以前はもっと遠いところに住んでいたが、夫が支部長なので、引っ越した。

丸山さんの家庭教育セミナー

(家庭教育研究所の) 丸山さんは2007年以来3回バングラデシュに来た。丸

山さんの話を聞いて、勉強をしたくないと泣いていた子どもをほめたら、子どもが勉強をやるようになった。

教会長の研修

教会長の研修には婦人部では50人くらい集まる。みんなで仲良くなれるのでよい。八正道、六波羅蜜、四諦の法門、日常生活での開祖さまの実践などを学ぶ。教会長がいるといないとではだいぶ違う。教会長がバングラデシュにいて、月1回研修があるのでよい。

導きについて

飛び込み布教（知らない家に行って布教すること）のように、4軒導いたことがある。ふつうは飛び込み布教は難しいが、妹と一緒に家庭教育のセミナーの前に訪ねた。仏教徒だが、佼成会はいらないと言われたことがある。それでもやめずに、続けて行った。

家庭教育などイベントがあると人に言いやすい。佼成会に入らなくてもよいけれども、見てくださいと言う。まずは道場に連れて行く。法座に座ったらおもしろくなる。

お金のために入会することができない人もいる。おたすき、数珠、経典で120タカ（約180円）かかる。払えない人にはあげるようにしている。（お布施は）毎日できなくても、1タカでもためてあげてくださいと言っている。

女性が導師・脇導師をやることについて

導師・脇導師を女性がやることには気持ちが動く。自分がんばれば、他の人もがんばる。すごくいいことだと思う。脇導師のお役の時に、おたすきなしでやってしまったことがある。その時、教会長さんから「大丈夫です。あなたの心におたすきを着けているので」と言われて、気持ちが楽になった。

女性の活動を活発にするには

女性は家庭のことで忙しいが、自分のスケジュールを守って、時間をつくることが大切だ。自分のこともよくできるし、他のこともできるようになる。そ

う実践している。自分のスケジュールを自分でつくっている。婦人部の人は忙しい。時間をつくるのが難しいが、佼成会に入ると時間をつくることができるようになる。

佼成会を広めるための工夫

壮年と婦人は別々ではなく、一緒に研修したほうがよいと思う。家庭教育の研修は両方が受けたらよい。夫と子どもの気持ちが合わない人が多い。夫にとっても子どもへの対し方について勉強になるはずだ。近所に住んでいる人は会員だが、道場の近くに住んでいるのに来なかった。しかし、丸山さんが来て家庭教育の研修を受けてから、自分より早く道場に来るようになった。

女の人に、洋裁、ハンディクラフト、料理を一週間に1度教えたら、佼成会にも来るようになるかもしれない。こうしたことは、お金を出しても習いたい人もいる。

(4) 事例6 ジョンナ・バルア（古参会員）

属性

ジョンナ・バルア（女）は、42歳、3人（男2人、女1人）の子どもがいる。大学卒（法律専攻）で、洋服の卸の小さな会社に勤めている。夫は財政関係の国家公務員である。

佼成会への入会と活動

2002年2月に道場落慶の式典があり、その時に、これは何かとBKさんに尋ね、その後入会した。夫と一緒に入会したが、夫はあまり熱心な会員ではない。導きの親はBKさんである。お役はないが、古参会員（シニアメンバー）である。

上座部仏教との違いと佼成会の魅力

上座部仏教の寺には週に1回は行く。佼成会の道場の近所に住んでいるので、佼成会には毎日のように行く。法座は毎日はないが、ご宝前の給仕やご供養を



写真16 チッタゴン寺の地湧の菩薩への供物
人々が食べるものと同様な食べ物があがっている

する。佼成会ではご飯は道場でたくが、バングラデシュの習慣では供物をもつていく。初めのころ嫌だったのは、野菜や果物をお供えして、それをあとで食べることだ。バングラデシュでは果物は切って仏様に差しあげる。佼成会では切らないままあげる。また、バングラデシュでは、供物をあげたあとは捨てる。

佼成会で魅力に感じていることは、女性でも導師のお役をいただけることだ。こうしたことはバングラデシュにはない。女の人も自分でやることのできるのはいい。また、法座の中で自分の心を出せること、自分たちでお経をあげるのがいいなと思っている。

自己変革

佼成会に入って変わったと思う。入会前にはよく怒った。佼成会に入って我慢する勉強をした。自分が怒るので夫は静かだった。セミナーを聞いて、自分

のあり方を思い出してよくなかったと思うようになった。

導きについて

これまで50人以上の導きをした。家族が平和になるため、世界が平和になるため、佼成会に連れて行き、導きをする。法座には魅力があるので、まずは道場に来てくださいと勧めている。

仕事が見つかるように念願するとかいうことは思っていない。道場には修行の場として行く。入会するとこういうよいことがあるから、といった言い方で入会を勧めるようなことはしていない。自分の生活の中での修行は、人とよいコミュニケーションができる関係をつくることが大事だと思っている。

(5) 事例7 シティ・バルア（一般会員）

属性

シティ・バルア（女）は、25歳である。19歳の時に11歳年上の夫と結婚し、5歳の女の子がいる。結婚前は幼稚園の教諭をしていた。結婚後も、パスという2年間の大学のコースで1年勉強し、計14年間学校に行った。夫は外資系の会社の血液の検査技師で、大学卒である。

結婚は見合い結婚⁽¹⁷⁾で、家族からこの人はどうかと言われた。付き合っていて好きな人もいたが、見合いをした。もし、自分の好きな人なら、年が離れていない。見合いの場合は年が離れている。結婚相手は仏教徒に決まっている。仏教徒以外とは結婚できない。

現在、夫の弟が仕事の関係で同居している。

佼成会への入会と活動

2007年2月に入会した。家族は上座部仏教徒で、入会者は自分のみである。導きの親は、ジョンナ（事例6）。バングラデシュの仏教徒は、お寺を見たらお参りするが、佼成会はお寺なのでお参りした。ご供養のあとで法座があった。法座でジョンナに会った。「佼成会に入らない？」とジョンナに聞かれた。こ

のお寺はいいなと思ったので入会した。初めて見た時、日本のご本尊なので見た感じが違っていたが、日本のお寺ということはわかっていたので、抵抗はなかった⁽¹⁸⁾。

当時、問題を抱えていた。2007年1月3日12時に息子が生まれて、その夜に亡くなった。息子が亡くなって悲しかった。そのことを法座で話した。その時、佼成会では毎日お経をあげるのかと聞いた。自宅は佼成会から5分くらいの距離にあって近いので、当時は、毎日道場に行ってお経をあげた。今は週に1～2回行く。式典の時はジョンナから電話があり、行く。

お役はないが、協導師はやったことがある。誰が何日に担当するというスケジュールがある。

上座部仏教との違いと佼成会の魅力

上座部の寺では、説法とお参りだけ。ご供養はお坊さんと一緒にやることはできるが、自分だけではできない。寺では、お坊さんから「ご供養はどうでしたか」という話もない。お坊さんは偉い人で、自分は話すが人に聞いたりしない。佼成会の法座では、「みなさんどうですか」という話しかけをする。法座の中で自分の話ができるのがすばらしい。「自分たちのお寺ですよ」というのはすばらしい。法座ではみんなで家族のように話す。法座の中で自分の気持ちが出せるし、みんなの気持ちを聞ける。佼成会には気持ちを出せるシステムがある。寺の場合は、ご供養が終わったら帰る。話すことはない。佼成会の法座では悲しいことも話せる。苦しんでいると言うと、私もそういうことで苦しんでいますという話が出る。

亡くなった長男については法座で、「これは仏様のはからい。あなたのような人たちもここにいる。息子さんの人生が一日だけだったのも仏様のはからいだ。今やれることは念じて、名前を書いてご供養するだけ（注：佼成会式の戒名をつけて供養すること）」と言われた。そして法座の中で、同じような体験をした人の話があった。自分の娘もそうだったという話を聞いて、このような

人がたくさんいることがわかり、自分の心が楽になった。

佼成会に入会して、心が強くなった。法座で話を聞いて、悲しいこと苦しいことも我慢できるようになった。

上座部仏教と佼成会は両方ともよいところがある。佼成会のすばらしいところは、自分の生活で実践できることだ。ご飯を食べる前に「いただきます」というのもすばらしい。日本の習慣はよいと思う。今まで日本の習慣や文化は知らなかったが、バングラデシュでは食べ物に感謝する習慣はない。日本に対しては日本人を見ていいなと思っている。

導きについて

家庭教育のセミナーがあった時に、導きをしたことがある。セミナーは夫と妻との関係の勉強、子どもの育て方の話でよかった。日本では女は自由だが、バングラデシュでは女は自由でない。自分が思うには、実践が一番必要だ。伝える時には伝える気持ちがないと伝わらない。夫には佼成会の話はしているが、まだ会員にはなっていない。

(6) 事例8 リピィ・バルア・チョードリ（一般会員）

属性

リピィ・バルア・チョードリ（女）は44歳で、19歳と13歳の2人の娘がいる。19歳の娘は医学部に在学中である。仕事はYMCAの小学校の校長で、2005年に数学の教師から校長に昇格した⁽¹⁹⁾。大学院修士課程（化学専攻）を修了している。夫はチッタゴンにあるスイス系の会社に勤めている。結婚したのは大学2年の時で、結婚後親が亡くなったので、夫が学費を出してくれ、大学を卒業した。バングラデシュの夫婦関係は、男が上、女が下だという考え方が強い。夫の考え方は普通のバングラデシュ人と同じだ。以前は口では言わないが、仕事をやめてほしいと思っていたようだ。今は仕事をしてもよいと言っている。



写真17 婦人部の人たちと
左からジョンナ、デビカ、筆者、リピー、リピーの2人の娘



写真18 リピー（一般会員）宅の宝前
佼成会の額装本尊の他、高僧の写真、シボリ尊者などさまざまな絵が掲げられている

佼成会への入会と活動

入会したのは2009年（注：インタビューの6カ月前）で、導きの親はルパリ（親戚だが友達のような関係、41歳、女、1999年入会）である。ルパリが佼成会に行っているのを聞いて、自分も行きたいという感じだった。父が日本に行ったことがあり、日本はよいと言っていたので、よいイメージがあった。父から聞いたのは、日本人は親切、時間を守るということで、これはすごいと思う。時間を守ると責任感が生まれ、どんなこともできる。時間を守る人は信じることができる。学校でも生徒が遅れたらなぜなのかを聞く。入会時に何か問題を抱えていたということとはなかった。

上座部仏教との違いと佼成会の魅力

上座部仏教の寺には一週間に1～2度は行く。佼成会には週に1回（婦人部担当の土曜日9時から12時まで）と式典に行く。自分が好きなのは佼成会の家庭教育だ。寺は説法を聞くだけで、家庭教育の実践がない。家庭教育は、家族にとってももちろんだが、学校でも役に立つ。子どもは携帯電話をほしがる。パソコン、テレビをほしがる。親が与えないと文句を言う。しかし、給料が高くないので、できない。

法座はすごくいい。法座の中で話すとコミュニケーションができる。バングラデシュではこのようなことはないし、お寺でもない。

自己変革

佼成会の教会で、実践しているのは家庭教育だ。以前は子どもに「やりなさい」と言ったが、家庭教育の話聞いてそう言わなくなった。（同席していた19歳の娘は、「母は我慢するようになった。前は怒ったが、今は怒ってもあとで優しくしてくれるようになった」と語った。）

導きについて

導きは、まだしていない。きょうだいと母を導こうと手どりしている。妹には家庭教育のことを伝えている。妹は子どもが勉強するようにと叩いている。

そうすると家族の雰囲気が悪くなる。それなので、妹にはジャパン・モンギ（日本の寺）に行ったほうがよいと勧めている。

5 青年部の場合

バングラデシュの佼成会では青年部は活発である。2009年3月にはチッタゴンで多数の青年が集まった青年結集大会「バングラデシュ青年菩薩の集い」を成功させた⁽²⁰⁾バングラデシュ教会の青年部長である事例9のオニメシュ・バルアとチッタゴン支部の青年部長である事例10のシャソン・バルアは、青年結集大会の準備中の多忙な、気分の高揚した時期にインタビューした。事例11のルモン・バルアは青年部の伸びが著しいコックスバザール法座所の青年部長で、事例12のフルフル・センは、同法座所のラカイン族の女子部長であり、同年9月にコックスバザールでインタビューを行った。

バングラデシュ教会では青年のリーダー研修も行っており、男女青年部員が集まり、またバルアとラカイン等の少数民族がつどって研修するなど、バングラデシュでは画期的なものである。イベントも計画をたてて実践するなど、娯楽の少ないバングラデシュでは楽しみの要素も付加されている。とくにコックスバザールでは、同じ仏教徒でありながらベンガル系のバルア仏教徒とミャンマー系のラカイン仏教徒が分断されていたが、青年の活動から始まり、相互の理解がすすんだことは注目すべきである。

現会長の庭野日鑑による「三つの実践」（あいさつをする、「ハイ」とハッキリ返事をする、席を立ったら椅子を入れ、履物を脱いだら必ずそろえる）という日常的な実践が奨励されており、青年部の中でもこれらの実践について言及されている。



写真19 青年部のリーダー教育
チッタゴンのホテルが会場



写真20 男女青年部員が
一緒に班になって討議



写真21 青年結集大会のあと
リーダーが集まり集合写真撮影
男子青年部員は御揃いのポロシャツを
着ている。右から4人目は
バングラデシュ教会青年部長のオニメッシュ、
5人目はチッタゴン支部青年部長のシャソン



写真22 青年結集大会のあとの打ち上げで
踊り，歌う青年部員ほか

(1) 事例9 オニメシュ・バルア (バングラデシュ教会青年部長)

属性

オニメシュ・バルア (男) は35歳，大学卒のエンジニアであり，建設会社に勤めている。34歳の時に結婚した。

佼成会への入会と活動

佼成会には妹の導きで、2003年初頭に入会した。佼成会がどのような宗教かわからなかったが、妹から日本の寺があると言われて行った。法座が気に入ったので入会した。日常生活で修行・実践できることがよい。「あいさつは笑顔で」というのはよかった。入会時には問題を抱えてはいなかった。

現在の役はバングラデシュ教会青年部長である。直接の導きの子は35人いる。

上座部仏教との違いと佼成会の魅力

上座部仏教では、お坊さんが寺で説教する。佼成会はみんなの中で自分の気持ちを出せる。そして実践することが大切だ。バングラデシュでは2,500年前に仏教が始まったのでバングラデシュに仏教はあるが、実践はしない。佼成会は実践するのでよい。開祖さまの教えを広めたい。

自己変革

佼成会のすごいところは、「自分が変われば、相手も変わる」ということだ。結婚してから、妻との間により経験があった。結婚したあとで、妻はいつも自分に一緒にいてほしいと言うが、佼成会の活動があるので、留守にすると怒ったりする。自分はだれかに怒られた時には、自分も怒ってしまうほうだ。しかし、怒らないように自分が変わったら妻の態度も変わった。佼成会で教えられた椅子をテーブルの下に入れること、自分も怒らないことはいいことだと思う。

佼成会に入会する前は自己中心的だった。やりたいことをやっていた。佼成会に入ってから、そうではなくなった。以前は友達がいなかったが、友達ができた。

日本に対するイメージ

日本については、小学校の時に教科書でヒロシマ、ナガサキのことを読んで悲しかった。日本人のがんばっている姿を見てよいと思う。

佼成会の教えや実践の中で気に入っていること

法座が一番よい。心の中の深いところに入っている話もできるし、いろいろ

な人といい関係になれる。法座では「結ぶ」人は決めていないが、一人がリーダーになる。青年部長なので法座主になることが多いが、学ぶことも多い。金曜日はバングラデシュでは休みの日なので、人がたくさん来る。

佼成会の宝前

上座部仏教のご宝前とだいぶ違う。日本に行って佼成会の本部の釈迦牟尼世尊のご本尊を見てよいと感じた。開祖さま、脇祖さまの写真については、佼成会に新しく来る人には変な感じかもしれないが、あとで意味がわかるとよいと思う。

バングラデシュ人は、新しい何かが来るとよいと思う傾向がある。佼成会の実践、法座を見ていいと思う。

青年部長として抱えている問題

青年部長になってからはたくさん問題がある。一時、青年部の心が一つにならずに大変だった。2004年の終わりに、セミナーで青年が集まった時、一人の青年が怒って苦勞した。自分がちゃんと連絡をしなかったからだ。連絡をすれば怒らなかったのではないかと。

また、青年部と年配者との間の関係がある。青年部の人は呼ぶとすぐ来るが、年配者はあまり集まらない。

(2) 事例10 シャソン・バルア（チッタゴン支部青年部長）

属性

シャソン・バルア（男）は28歳で、独身である。テレコミュニケーションのカスタマーサービスに勤務している会社員である。チッタゴン大学修士課程修了で、ビジネス・アドミニストレーションを専攻した。大学院まで出ているが、家は金持ちというわけではなく、家庭教師をして大学の授業料を出した。

佼成会への入会と活動

佼成会に入会したのは2004年。初めて佼成会の話を聞いたのはオニメシュ（事

例9) からだが、導きの親は兄である。佼成会の教えがいい感じと思って入会した。何よりも法座が一番だ。自分の話を伝える、人の話も聞く、それがいい。入会時、問題は抱えていなかった。

直接の導きの子は18人である。チッタゴン支部青年部長をしている。

自己変革

佼成会に入って、実践して、我慢するようになり、みなから褒められた。これは職場で働いている時にも役に立つ。

日本人は時間を守る、ルールを守る。こういうことを見習いたい。佼成会に入る前は自分もバングラデシュ風だったが、少しでも時間やルールを守るようになった。佼成会に入ると掃除は自分たちです。大学生の時は部屋の掃除をしなかったが、佼成会に入ってからするようになって、家族に褒められた。

佼成会の宝前

佼成会のご宝前は変な感じはしない。本尊の久遠の釈迦牟尼仏の姿を見てよかった。佼成会のご本尊は立像だが、バングラデシュにはいろいろな形の仏像がある。

佼成会を広めるための工夫

青年の場合は文化的テーマをつくるのが大切だ。明日(2009年3月)の青年大会でも歌とかダンスとか出し物を出す。楽しむチームをつくりたい。

バングラデシュは貧しい国なので、自分も大学院まで行っても思うような仕事が見つからなかった。そういう青年たちが集まって仕事をつくるのはどうか。青年は仕事を見つけるための活動をしなくてはならないので、佼成会の活動に來られない。佼成会でトレーニングセンターをつくれば、お金ももらえるし、活動もできる。

青年部メンバーで何も仕事をしていない人も多い。仕事を探すのが難しい。大学、大学院に行っている人で、一番収入がよいのが家庭教師のアルバイトだ。

医師を呼んで研修をしたり⁽²¹⁾、青年に体操を教えたり、英語を教えたり、

子どもにコンピュータの勉強をさせたら、もっと来る。

佼成会はもっと広まると信じている。今、入会カードをもらっている青年が4,000人、1年後には1万人になるようにがんばる。

青年部の活動

青年の中には中学校卒はいる、高校卒は多い、そして大学卒、大学院卒もいる。青年だけで法座をする。初めはみな法座とは何かがわからなかったが、今は法座でみなよく話を出す。そこで出てくる問題は、第一が人間関係、第二は国が貧しいのでお金のことだ。

青年男子と青年女子とは別に考えなければいけないと思う。女の人は遅くまで活動できない。このことは気をつけている。親が佼成会メンバーの娘が活動している。佼成会の会員同士で結婚したケースは1組ある。

Shanzai という佼成会のニューズレターがある。これをベンガル語に翻訳し、バングラデシュのニュースを入れてニューズレターをつくっている。

青年部活動に関する青年からの不満は、活動をやる時にルールがあり、自分で計画してもなかなか実現できないということだ。

教会長がいるといないとでは、すごく違いがある。教会長がいれば話ができる。

(3) 事例11 ルモン・バルア（コックスバザール法座所青年部長）

属性

ルモン・バルア（男）は、34歳で、独身である。コックスバザール出身で、エビの養殖やエビのえさの輸入会社を3人で共同経営している。ロシアに1993年から1998年にかけて滞在し、モスクワ大学を卒業した。子どものころからロシアに行きたかったことと、兄がロシアで仕事をしているので、ロシアに行った。

コックスバザールは人口約20万人、そのうち20%が仏教徒である。



写真23 コックスバザール法座所でのルモン（2012年撮影）

佼成会への入会と活動

2006年5月ころに入会した。導きの親はチッタゴンに住む従兄弟のファビ・バルアである。コックスバザールで佼成会の集まりがあるので、関心があったら来てくださいとの呼びかけで、2回行き、1年後に入会した。

佼成会に関心があったのは、ロシアにいた時に、アメリカ人の友人からどういいう修行が好きかと問われ、自分は仏教徒だと答えた。しかし、仏教のことを教えてほしいとの問いかけに対して、自分は仏教のことがわからず教えられなかった。そこで、仏教を勉強したいと思っていた。佼成会の人は親切だったので、仏教の修行について学ぶために佼成会に入ろうと思った。

導きは20人以上した。青年部長のお役をいただいたのは2年半ぐらい前（2007年ころ）だ。チッタゴンには年に2～3回研修に行く。自分の仕事では、チッタゴンに月に2～3回行く。その時には佼成会にも寄る。

自分がやっているビジネスは12月～7月という季節ビジネスなので、あとの半年は何もやることはしない。その時間をうまく佼成会に使っている。忙しい時に佼成会の行事がある時には、共同経営者2人に任せて、佼成会のことをする。

上座部仏教との違いと佼成会の魅力

父母は上座部仏教の寺に行っていたが、家族の中は自由な雰囲気だったので、自分は寺には行ってはいなかった。

佼成会のすごいところは、自分のためではなく、「まず人さま」というところだ。

自己変革

父はいい人だが、母は厳しい人だ。父にも他の家族にも厳しい。何かやろうとする時、いつも母が反対する。教会長のご指導の「自分が変われば相手も変わる。まずあいさつをしてごらんなさい」というのを実践している。怒りっぽかったが、我慢するようになった。頭を下げ、笑顔で話すようにした。しかし、こうした実践をしても母との関係はよくなるらない。けれどもあいさつをすると母が笑うようになった。他の人からはルモンは変わったなと言われている。

教えについてはいつも青年たちに伝えている。日本の佼成会本部に行ったあとも気づいたことはみんなに伝えている。

日本についてのイメージ

自分は外国に13カ国行ったことがある。日本にもリーダー研修で行った。日本はきれいな国で、日本人は丁寧で親切、やる気が強い。日本の電気製品は人気だ。それはよいものだからだ。佼成会もよいものだ。

日本にリーダー研修に行った時、日本では女性の活動者が多いのに驚いた。また、上の人が靴をそろえたりしているのを見て感動した。すごいと思った。食事のあとで、みんなの皿を洗ったり、掃除をしたり、トイレの掃除をしたりというのはよい勉強になった。

青年部の活動

金曜日（バングラデシュの休日）に法座所で、10時から13時までミーティングをする。金曜日には法座所に50～60人来るが、そのうち70%が青年である。その他にも青年部で毎週2～3回は集まる。コミュニケーション、歌、踊りなどをする。月に2～3回はみんなで海岸にピクニックに行って、バーベキューをしたりする。こうしたアイディアは自分が出した。青年たちは遊びたい。一緒になって楽しくないと集まらない。

（2009年）3月のチッタゴンでの青年大会の時、コックスバザールの青年だけで1,200人がYouth Divisionのカード（注：正式な入会カードとは別の青年部の登録カードのこと）に申し込んだ。このようなものをもらうのは楽しみである。コックスバザールの村の人もいるが、遠くてあまり来られない。町の人と村の人は違う。村に法座所ができれば集まることができると思う。村の人への手どりは、村の一人が責任者になって、みんなにニュースを伝える。8カ村あるので、8人の責任者がいる。責任者は月に2回くらい町に集まる。一回は有富教会長のダルマクラスがあるので、それに参加する。

青年部の好きなところは「まず人さま」ということと、活動の楽しみの要素だ。

青年部の抱えている問題

コックスバザールの青年部は、16歳から24、25歳の青年が多い。ほとんどが学生だ。それで式典の時のお布施が大変だ。お金の問題、それ以外はない。学生でも壮年部や婦人部の人よりもお布施は出している。道場に行った時は、10～30タカ出している。

ラカインとバルアの交流

佼成会が入る前は、（ミャンマー系の）ラカイン仏教徒（顔だちもモンゴロイド系）とバルア仏教徒の両者は一緒にならなかったが、佼成会は一緒になって何かやるという歴史をつくった。佼成会の活動はみんな一緒だ。



写真24 コックスバザール法座所での有富教会長による指導（2012年撮影）
アボンが通訳をしている

ミャンマーとの国境にあるコックスバザールには、元々ラカイン族が住んでいた。ラカインの古い寺もある。バルアはあとから来た。バルアもラカインも仏教徒だが、一緒にやろうという気持ちはなかった。開祖さまの「まず人さま」、「一緒にがんばりましょう」を元に一緒にやるようになった。

バルアとラカインの恋愛はこれまでなかったが、今後はありそうだ。しかし、二人は好き合っている、また、たとえ父母がOKでも、それぞれの社会があるので、問題になると思う。バルアとラカインが結婚するのは、外国人と結婚するより難しい。

教会長のコックスバザールでの研修

教会長の研修には150人以上参加する。法座所でやる。参加者の50%は青年だ。主にカンチャン・バルア（チッタゴン支部長）が通訳をする。

法座所にはアボン・バルア（元海外修養生、スタッフ）がいる。アボンとい

う名前の意味は心の近い人という意味だ。人気がある。教会長の研修でわからないことはアポンに聞く。

佼成会を広めるための工夫

佼成会のトレーニングセンターをつくる。トレーニングをして商売をやってお金をもらえれば、生活もできるし、佼成会のこともやる。トレーニングセンターのアイデアとしてはエビの養殖、機械技術（テレビ、冷蔵庫、照明など）、よりよい農業のための技術の習得などがある。

（4）事例12 フルフル・セン（コックスバザール法座所ラカイン族女子部長）

属性

フルフル・セン（女）は17歳、高校生である。コックスバザールのラカイン族で、父母はミャンマーから来た。きょうだいは兄2人と、姉が1人いる。

佼成会への入会と活動

2007年に、ルモン・バルア（事例11）の導きにより入会。叔父とルモンが友達だった。佼成会では修行を実践していること、ラカインとかバルアとか関係なく、平等にできるという話を聞いた。

導きは22人以上した。コックスバザールのラカイン族の女子部長（ガールズリーダー）をしている。

バルアとラカインの関係について

同じ仏教徒だが、ラカインとバルアの関係はあまりよくない。バルアとラカインは服、食べ物、考え方も違う。ラカインは、バルアはよくない人と思い、コミュニケーションができなかった。ラカインだけで固まっている。今までバルアとラカインは結婚することはなかった。（佼成会の活動をとおして、バルアとラカインが知り合い、結婚する人が出てくるかという問いには、）今後どうなるかわからないが、自分が好きになったら、どこかに行って結婚することはあるかもしれない。ラカインの女とバルアの男の組み合わせは絶対に結婚は



写真25 コックスバザール法座所の
ラカイン族の女子部長フルフル

できないが、バルアの女とラカインの男の組み合わせならばできるかもしれない。

上座部仏教と佼成会の違い

ラカインではお坊さんが説法をし、お坊さんがご供養をする。佼成会では導師・協導師のお役をいただき、みなでご供養できる。ご供養の時、おたすきをし、お数珠をもつ。ラカインのお坊さんはこのようなことはしない。佼成会のおもしろいところは、ご供養のあと法座で話をするができることだ。入会する前は、知らない人と話すことができなかった。ところが、このようにこれまで知らなかった人

(注：筆者をさす)と話すこともできるようになったのは、法座の功德だ。

導きをする、ラカインの仏教では坐像か涅槃像なので、ご本尊はなぜ立ったままの姿なのか、と問われることがある。それには、佼成会は日本から来たもので、仏像は日本のスタイルでつくったが、教えは一つと答える。上座部では椅子を使わないので、導師・協導師をするときの椅子はどうやって使うのかという問いもある。自分は1回だけ導師をした。協導師は何回かしたことがある。

バングラデシュで、額装ご本尊のお祀り込みがいやだという人はいない。どの家にもブッダの写真がある。

自己変革

我慢するようになった。朝起きてあいさつをするようになった。(バングラ



写真26 コックスバザールにある
ラカイン族の寺院



写真27 ラカイン族の寺院の仏像と高僧の絵



写真28 ラカイン族の寺院の
仏陀の坐像と涅槃像（寝仏）



写真29 ラカイン族の僧侶

デシュでは上の人にいつもあいさつをするという習慣はない。）

佼成会に行く時に、初めはどこに行くのかと親に言われた。自分が怒らずに我慢するようになって、母は佼成会のことを理解してくれた。コックスバザールであった家庭教育のセミナーにも母をつれていった。父も理解し、チッタゴンで研修がある時でも出してくれる。とってもうれしい。外出するには何か理由がないと認めてくれない。今回（筆者との）インタビューのために（村から）コックスバザールに来るのも父母にお願いした。

導きについて

佼成会に来るように誘ったりしている。バルアもいるし、男の人もいるので、ラカインの女の人には恥ずかしがって来ない。「何も心配しないで来てください、自分もやっています」と言う。今まで誘った人はみな来た。

佼成会の活動で楽しいこと

式典の時に、いろいろなお役をすることが楽しい。ボランティアのようにカードを書いて渡したり、世話をしたりするのが楽しい。

将来の夢

大学でコマース（商業）の勉強をして、銀行に入りたい。昔は、ラカイン族は勉強をしなかったが、今は勉強をして仕事をしたいと言うように変わった。勉強する、会社に行くという考え方が増えている。

佼成会を広めるための工夫

学生たちに奨学金をあげたら、ラカイン族の人々が入ってくるかもしれない。学生たちは奨学金に関心がある。これからはラカイン族も勉強をしなければいけない。

6 考察

これまで、壮年部、婦人部、青年部に属するメンバーに対して聞き取りを行った事例の内容を提示してきた。バングラデシュの場合、他のアジア諸国に見られるような戦争と関連した反日感情の存在（韓国の場合）や、同じく植民地支配がありながらも比較的プラスのイメージをもっている場合（台湾の場合）のような、戦争と関連した負のイメージが全くない。（チッタゴンには第二次世界大戦中に近くの野戦病院で亡くなった日本人兵士の墓がある。）バングラデシュには日本政府から経済的支援があり、NGO レベルでも支援がある。バングラデシュ人は日本についてポジティブなイメージをもっている。また、テレ

ビ番組の「おしん」(1983年4月～1984年3月まで放送されたNHK連続テレビ小説)はバングラデシュでも放映されたが、30歳くらいの比較的若い世代もその内容には大変関心をもっていた。開祖庭野日敬の生涯を学んだ人は、新潟の農村から東京に出て佼成会という大教団をつくった人として、「おしん」とオーバーラップする成功物語として受け止めているところもある。また、聞き取りの中にも表れているように、バングラデシュの教科書ではヒロシマ、ナガサキのことを学び、敗戦の中から経済成長をとげた国として、日本に対する尊敬のまなざしがある。

佼成会に入会しているのは、イスラム教国の中のマイノリティである仏教徒である。ここで、壮年部、婦人部、青年部の聞き取りから共通して見出せること、各部の独自のものとして見出せることを整理してみよう。

入会動機については、貧病争といった問題から入会するというのではなく、「新しい菩薩行に関心」がある人、佼成会と上座部仏教は二者択一のものではなく、「願いは一つ。しかし、やることが違う」という説得や、何より法座を見て魅力を感じている。ここで扱った事例の中では唯一婦人部のシティ・バルア(事例7)が入会時に子どもを亡くしており、法座での会話の中で心が救われたというものがある。今回聞き取りをした人々は、比較的高学歴の人であるが、お役を遂行しているうえで、貧病争などの問題よりも佼成会の実践に関心があるようである。

バングラデシュの仏教徒の場合、学校では各々の宗教に応じた学習があり、教義についても知識がある。上座部仏教の寺への参拝することも日常的に行われている。上座部仏教では僧がパーリ語で読経をし、説法する。佼成会では日常使っているベンガル語のお経で、みんなと一緒に供養をする。そして、法座という自分の気持ちが出せ、人の話も聞ける場がある。

「実践に魅力がある。ご供養。まず人さま、互いに助け合う。法座で楽しいこと、悲しいことを話せる。法座が一番」と述べた人がいたが、佼成会の一番

の魅力は、どの年代、性別の人にとっても法座である。僧侶が一方的に説法して、それを聞くのではなく、法座のような「自分の気持ちを出せるシステム」は彼らにとって驚きでもあり、大変惹きつけられるもののようである。

「自分が変われば相手も変わる」ということも実践している。壮年部・婦人部・青年部の人々は、入会後の変化として怒らなくなったことを挙げる。また家族や周囲の人々の言からもその変化がうかがえる。壮年部、青年部の人々が口ぐちに言うのは、佼成会に入って「時間を守る」「ルールを守る」大切さを学んだことである。あいさつをすることや椅子を入れること、掃除をすることについても実践し、それなりの結果を感じている。

婦人部の人々は、日本の佼成会が提供する家庭教育のセミナーには非常に関心をもっている。バングラデシュと日本とは状況が異なり、日本の家庭教育のセミナーがバングラデシュで応用できるのかという疑問を筆者はもっていたが、ある程度以上の階層にとっては子どもが勉強すること、よりよい学校に行くことは切実な問題だった。また仏教徒はバングラデシュのマイノリティなので、学歴を求める気持ちも強いように見受けられた。バングラデシュでは親子関係は上下関係なので、「友達のように」、「子どもの目線に立って」という話は大変新鮮に受け止められている。家庭教育についての関心は高く、それを実生活に応用することによって結果が出ている様相が伺える。また近年、家庭教育の講演を婦人部のみならず、壮年部も一緒に聞くことで、さらに家庭の中に変化が出てきている。

女性だけが言及していることは、佼成会では女性が導師・協導師をすることができることの喜びだ。バングラデシュでは女性の地位は低く、女性が主体になってやる場は少ない。婦人部担当のご命日に、導師・協導師を女性たちだけでやることは、とてもうれしく、晴れがましく誇らしいことである。女性一人で外に出ることはあまりなく（実際、道を見ても女性が歩いていることは少ない。買い物も男性、商店の店員も男性である）、女性たちは「内」「奥」担当で

ある。そうした女性たちが、自分たちでもできることを自覚し、家事で忙しいながらも時間をつくって、外に出て、佼成会の活動をしている。女性のエンパワーメント、女性の自立、目覚めという点で佼成会の果たしている役割は大きい。

青年たちにとって、法座は自分の気持ちを出せるということで、魅力的な場である。また、バングラデシュには娯楽は大変少なく（映画館もほとんどない）、またイスラム教国なので、禁酒の社会である。自分たちで行う歌や踊りの娯楽の要素（これを青年結集大会で披露していた）、バーベキュー等の楽しみの要素を青年部活動に付け加えていることも、青年部の活動の魅力の要素である。青年の発案を生かそうとしていることも青年部の伸びをもたらしている。

佼成会の果たしている役割で特筆すべきものに、コックスバザールの事例に見られるバルア仏教徒とラカイン仏教徒との間の関係にかかわるものがある。同じく仏教徒でありながら、バルアとラカインは文化も習慣も民族も異なり、相互に交流はなく、バルアからのラカインに対する差別があり、またラカインは自らの文化の中にとどまっていた。しかし、佼成会の活動をとおして、両者の交流が生まれ、その壁を越えた。青年部においては特に顕著で、佼成会という外来の宗教が両者の橋渡しをしたことは注目すべきである。

佼成会を広めていくためにはどのようにしたらよいのか、という問いに対して、壮年、婦人、青年にかかわらず述べるのは、技術の習得のためのテクニカルスクールをつくること、NGOのような形での仕事の創出への期待である。婦人たちは託児所の設置や手工芸品を作る場という案を出していた。バングラデシュは世界の最貧国の一つで、人口密度の高さ、失業率の高さが顕著である。大学を出ても仕事がない。イスラム教徒が多数の国にあって、マイノリティである仏教徒は就職においても差別があり、とりわけ困難な状況におかれている。こうした背景と、キリスト教がNGO的な活動をして信者を増やしていることも、彼らの提案のイメージにあるようである。テクニカルスクールといった発

想や雇用創出と佼成会の布教とからめて考える彼らの考え方については、採用を躊躇されるものであろうが、このような要望が異口同音に出てきている国情を考えると一考する必要もあろう。(しかし、2012年の調査ではこのような話は出なかった。)

バングラデシュの場合は、海外修養生制度が機能している。佼成会には学林という幹部養成の教育施設があるが、海外修養生として1年目は日本語学校に通学、2年目には学林で教学他の学習、教会実習などを行っている。バングラデシュからは2000年に1人、2002年1人、2003年1人、2005年1人、2006年2人、2007年2人、2008年3人、2011年1人の海外修養生を出している。彼らのうちの何名かがバングラデシュで佼成会のスタッフとして活動し、言葉の壁を越える役割も果たしている。日本の教会の場合、本部から給与が支払われるのは教会長のみで、それ以外の教会内の役職は、いわばボランティアとして、無給で時間と労力を提供している。しかし、海外については状況が異なるため、スタッフにサポートマネーを支払う時代を経て、現在では正規の雇用契約がなされるようになった。海外修養生経験者の佼成会に対する思いとともに、彼らがスタッフとして定着しているのは、バングラデシュの社会状況ではよい就職先がないこととも関連している。海外修養生経験者がこうした社会状況だからこそ、他の企業にとられずに、活用できている面もある。(最近では、中国に集中することの問題が明らかになったことで、日本の繊維関係の企業がバングラデシュの安価な労働力に目をつけ、縫製関係での日本企業の新進出が見られる。)

バングラデシュの村から大都市まで観察してみて、都市と村落との生活格差が大変大きいことがわかった。バングラデシュの仏教徒は、一昔前の日本人を思い出させる、人柄のよい人々であった。そして、佼成会はバングラデシュの仏教徒に大きな影響を与えつつあるように思われる⁽²²⁾。日本において佼成会は、高度経済成長前夜から高度経済成長期にかけて拡大した。近代化前夜のバ

ングラデシュにとって、佼成会のノウハウが応用できるであろう。また、時間、ルールを守るという近代化に必要な生活態度を習得させる役割、女性のエンパワーメントの役割⁽²³⁾、文化・民族の違う分断された仏教徒を結合する役割、イスラム社会でのマイノリティの仏教徒に新たな共同体を与える役割など、重要な機能を担っている。

注

- (1) 1937年からイギリスが支配し、1937年にベンガル自治州の一部になったが、1947年、イスラム教徒が多いことから現パキスタンとともにパキスタンとしてインドから分離独立し、東パキスタン州となった。しかし、西パキスタンと東パキスタンは、インドをはさんで1,000キロの距離があり、言語的にも前者はウルドゥ語、後者はベンガル語であり、また、経済面での西パキスタンによる圧迫、およびウルドゥ語を唯一の公用語としようとした西パキスタンの動きに反発し、ベンガル人としてのアイデンティティに訴えた独立戦争を経て、1971年12月にパキスタンから独立した。
- (2) 谷山洋三『バルアの仏教と社会——バングラデシュの仏教徒の現状——』関西学院大学出版会、2006年、xix 頁。
- (3) 井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂、1990年、20頁。
- (4) 「佼成会では『まず人さま』と、昔から教えてくださっております。自分のことはさておいて、人さまが幸せになるようにと念じて仏道修行をさせて頂く。そのような気持ちになれた時に、欲や迷い、とらわれから離れることができるのです。人のために尽くしていくところに、煩惱や執着を超えていく道があるというわけです。」
佼成会ホームページ http://www.kosei-kai.or.jp/essay/180/1807/post_303.html (2013年6月14日閲覧)
- (5) 2009年3月27日、チッタゴン市内のエンジニアホールで初の青年結集大会「バングラデシュ青年菩薩の集い」が開催され、青年部員約2,200人が国内各地から参加した。バングラデシュ教会では、職場や学校などで青年部員による布教活動が活発に展開されてきたが、「青年部員による救い救われの展開」を目標に「入部登録」の推進に力を注いでおり、大会当日には5,000人が「入部登録」手続きを終えた。結集大会当日、青年部員たちは、部員番号と氏名が明記された部員証を提示し、会場に入場した。(筆者注：入部登録と佼成会への入会は異なる。入部登録をした者に対して、その後、セミナーを数回受講し、入会となる。またバングラデシュ教会では額装本尊の安置を入会の基本要件としており、安置式を順番で待っている状態である。なお、「部員証」は彼らにとって誇らしいもののようである。)

青年結集大会開催は、前年（2008年3月）の教会発会式直後に決定した。（2007年12月にバングラデシュ教会発足。初代教会長として有富教順が赴任。）同秋には、実行委員会を発足。国内の青年部員が一堂に会し、世界平和の実現に向けた異体同心の精神を確認するとともに、青年部員による一層の布教の展開を大会の目的に掲げた。以来チッタゴン支部はじめ国内7法座所の青年部リーダー約40人が中心になって一層の手どりや布教を展開した。また、毎月1泊2日の行程で教会道場に集い、準備を進めてきた。

立正佼成会 HP「バングラデシュ初の青年結集大会」の項を参照。（なお、文章はですます調からである調に一部変更してある。）

http://www.kosei-kai.or.jp/katsudo/190/2009-03-04/post_97.html（2013年5月14日閲覧）

- (6) 通訳をしてくれた人によるとオシムの娘は有名なダンサーだとのことである。
- (7) 2006年の第三回世界サンガ結集大会とは、「開祖生誕100年記念参拝」の一つとして行われたもので、17の国と地域から1,300人の海外会員が参集した。大聖堂での世界サンガ結集記念式典では、民族衣装をまとった参加者代表24人による奉献の儀のあと、読経供養が行われ、会員たちは母国語で読誦し、13カ国語での読経供養となった。続いて、ロサンゼルス教会と南アジア教会チッタゴン支部の会員がそれぞれ体験説法を行った。
http://www.kosei-kai.or.jp/news/2006/10/post_1017.html（2013年7月7日閲覧）
なお、バングラデシュからは60人が訪日した。飛行機代は本人もちで、日本での滞在費用は日本の本部が負担した。この時に日本の豊田教会との交流も行われた。
- (8) 有富教会長が初めて日本で行われるように彼岸の供養をバングラデシュでも始めた。バングラデシュでは先祖供養という考え方はない。しかし、このルーツ図をつくって名前を記入するようにしたため、とくに青年たちは興味をもって取り組んだ。
- (9) 日本の佼成会では、入会にさいして総戒名を祀り込み、六親眷属の名前を集め、佼成会風に戒名をつける。
- (10) タイのバンコクには佼成会のバンコク教会があり、南アジアの研修を行う場所にもなっている。
- (11) 同席したレカラニの家族の話では、壮年の法座では、家族、子ども、仕事といった話が出、青年の法座では、家庭のこと、勉強のこと、人間関係のことが話題に出ることである。
- (12) レカラニの夫は、佼成会の魅力について「お互いに助け合うこと、みんなで一緒にやることはよいこと。ルールを守ること、時間を守るとは、しっかりやる気持ちになった。これまで時間は9時といっても9時30分だったが、佼成会ではご供養する人

が1人だけでも時間どおりに始める。時間を守るとよい点は、時間を守ったら他のこともできる」と言う。

さらに夫は、「上座部仏教でも在家仏教でも同じ、願いは一つ、それは幸せになること。病気が治るとかの話はしていない。佼成会に来たらみんな一緒に幸せになれる。悲しんでいる人、苦しんでいる人は、教会で話をしたら、楽になる。法座では苦しみの問題は出る」と言う。

- (13) レカラニの夫も「他の人のため、仏の教えを伝えることはよいと思う。他の人のために尽くす。自分が変われば人も変わる。他の人から自分が悪くなくても悪いと言われたら、心が痛くなるが、よく考えて、あとで話し合って、優しく話して、その人のよいところを見つかる。こういうことは佼成会に出会うまではなかった。上座部仏教では自分の悟りを目的とするが、佼成会では教えを実践することが大切だ」と述べる。
- (14) 夫はレカラニの変化について、「妻は変わった。前はけんかの時、二人とも怒ったが、妻があまり怒らなくなり、怒っても自分が悪かったと言うように変化した」と語る。また、子どもたちは「昔、母からよく怒られた。家庭教育セミナーのあとで、開祖さまの教えを習ってから怒らなくなった」と言う。
- (15) バングラデシュの人は、佼成会の開祖庭野日敬が新潟の山奥から東京に出て成功した、といった「おしん」的なものに共感をもつようである。
- (16) 恋愛結婚はバングラデシュでは極めてまれなことである。
- (17) バングラデシュの仏教徒の間では見合い結婚が主流である。夫の経済力がついてからというので、総じて10歳以上の年の差があることが普通である。
- (18) バングラデシュの上座部仏教の仏像は、佼成会の本尊のように立像ではなく、坐像か横になっている涅槃像（寝仏）である。
- (19) YMCA は金持ちや中産階級の子弟の学校であり、YMCA の学校はバングラデシュに7つある。
- (20) 2009年の大会のあと、次は1万人大会をという目標を青年部で決め、2011年にはコックスバザールで1万人大会が開催された。
- (21) 実際に筆者が滞在中にバングラデシュ教会で医師による糖尿病のセミナーがあったが、たくさんの人が集まっていた。バングラデシュでは夜遅く食事をして、そのまま寝る習慣があるため、糖尿病にかかる人が多いという。また、第二の都市のチッタゴンですら娯楽施設が極めて少ないために、医師のセミナーに人が集まるのかと思ったが、人が集まる機会は重要なようだった。
- (22) バングラデシュのイスラム研究をしている日本人研究者からも佼成会の名前を聞いた。バングラデシュでの佼成会の勢いは注目されているようである。
- (23) バングラデシュでも次第に女性を表に出てくる方向性もみられる。村で聞き取りを

バングラデシュにおける立正佼成会の信仰受容

した時に少女たちは進学と職業への希望を述べ、母親は自分は学校には行っていないが、娘には学校に行かせたいと述べていた。また村から首都のダッカまで見たが、その格差は大きい。大都市に行くほど、女性が男性の中に入っても堂々と話していた。バングラデシュでは、女性の地位向上についてはまだまだ長い道のりがあるが、佼成会の女性へのエンパワーメントの役割は大きいように思われた。

付記

本稿は、2008～2009年の中央学術研究所からの研究助成「日本の宗教教団における国際布教の研究」による研究成果の一部である。

立正佼成会バングラデシュ教会の有富教順教会長およびスタッフの方々には種々のご便宜を図っていただいたことに感謝申し上げたい。とりわけ、筆者の調査に同行し、通訳の労をとってくださったコロール・バルアさんには大変お世話になった。

また、インタビューに応じていただいた方々にも厚く御礼申し上げる次第である。